

ocean+α

©ocean+α ウェブマガジンの二次配
付および画像・文章の複製、二次使
用を禁じます



鳥取

TAJIRI

日本海の
もうひとつの顔と、
そこに棲む生物たち

田後

海中ジオパークを潜る

「ジオダイブ」。

この言葉が初めて使われたのは田後の海だという。

荒波が印象的な冬の日本海だが、

それによって創り出されたダイナミックな景観。

壮大な地球の息吹が刻まれた

岩肌やアーチは、もはやアートだ。

季節が巡って夏になると、

岩の隙間から神々しい光が差し、

タジリアンブルーに包まれながら漂っているだけで

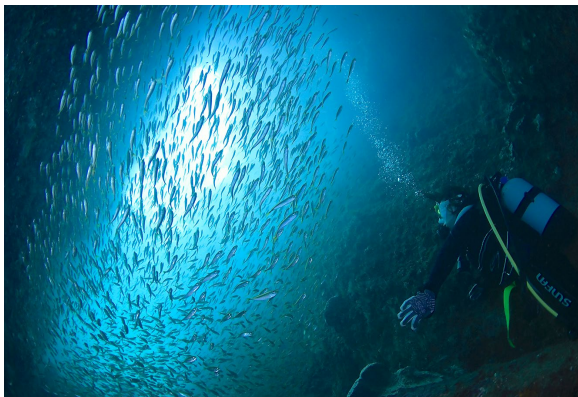
五感が解放されていく。

そこには荒々しい日本海のイメージが覆るほどの、

蒼く静かな海中の景色が待っていた。

空から見たジオパークの観光名所、
葉種五島。波の浸食でできた洞窟
や島の周囲もダイビングポイント

Photo & Text = Takuya Nakamura
Special Thanks = Blue Line Tajiri
Design = ParaviDesign



洞窟の中では目の前を覆うほどのアジの群れに遭遇

奇跡

の地形が
創り出す絶景

東西120km、南北30kmにおよぶ山陰海岸ジオパーク。ジオパークと呼ばれる地域は多いが、世界ジオパークネットワーク (GGN) に認定されているエリアは日本で8ヶ所しかない (図1)。そのうちの1つであり、地質学的にも貴重な地層や岩石の宝庫であるこのエリアには、多くの地質遺産が存在する。

そのうち東西約15kmの浦富海岸エリアにダイビングサービス・ブルーライン田後のある岩美町がある。“岩美”町

の名の通り、海食された花崗岩^{かこうがん}でできた美しい岩や、岩石の規則的な割れ目である節理が多く見られ、海の中にもそのような地形が続いている。

岩美町を代表する景勝地、菜種島^{なとうじま}周辺の大パノラマは一見の価値あり。その美しいリアス式の海岸線は、日本の渚100選にも選ばれているほどだ。高さ60mまでそびえる断崖絶壁のすぐ近くまで寄れる遊覧船は特に人気。

幸福なことに、菜種島の周囲も夏場イチオシのダイビングスポットとなっている。世界的に貴重な海岸線を船上から楽しんだ後、そのままダイビングで海中へと続く絶景を堪能できてしまうのだから、なんとも贅沢な体験である。



ダイナミックな地形が魅力の菜種島



まさに地球が創り出した神秘の光景。海の中にも「はさかり岩」が存在する



■図1
世界ジオパークネットワーク (GGN) に認定されているジオパーク (2017年10月現在)

鳥取・田後 海中ジオパークを潜る
2018 Winter [TAJIRI]

ブルー とエメラルドグリーンの ミステリアスな光

現在、世界の絶景がブームとなっているが、菜種島の「青と緑の洞窟」では世界の絶景に引けを取らない海中のミステリアスな景色を楽しむことができる。長い年月をかけて、波で侵食されることにより創られた洞窟。中に入り奥から振り返ると、2色の幻想的な光が暗闇

に浮かび上がる。

ブルーとエメラルドグリーンに染め分けられた光のマジック。沖側の入口と岸側の出口から見える透視度の異なる水に、太陽光が反射することでできる神秘の光景である。

タツ のハートマークを激写

ついにタツノオトシゴのハートマークを激写

田後の海を一躍有名にしたのがタツノオトシゴ[※]。有名なドキュメンタリー番組の撮影班が、この海でタツノオトシゴの産卵と出産の瞬間をカメラに収めた。そのとき裏方のガイド役に徹した最大の功労者が、ブルーライン田後のオーナーガイド、山崎英治さんである。

タツノオトシゴは産卵の際、オスの育児嚢の中にメスが卵を産みつける。そのシルエットがハートマークに見え、縁起が良いことからゲストからのリクエストも多い。だが、深夜未明に行われる出産の瞬間にも立ち会うとなると、お

のずとこの時期は眠れなくなる。それでも山崎さんはこの時期ほぼ不眠不休で海に潜り、データを取ることを欠かさない。そんな苦労をしながらも、見られる産卵シーンはなんと10秒あまり。なぜ休まず潜り続けるのか問うと、「日を追うごとに可能性は絞られていくのに、途中で棄権するなんてもったいない」と笑みを浮かべた。

瞬きすれば終わってしまうような瞬間を逃すまいと、タツノオトシゴと対峙する山崎さんの姿には哀愁すら感じる。

5月某日、その日産卵するかもしれ

ないペアが2組いるという情報を聞き、田後を訪れた。実はこの1ヶ月前に同じ2組のペアの産卵を狙っていたのだが、想定と異なりあまりに一瞬で終わってしまったため、中途半端な写真しか撮れていなかった。リベンジということで今回は失敗できない。

そしてその瞬間は突然訪れた。しかも1ダイブで2ペアの産卵シーンを写真に収めることができた。念願のタツノオトシゴのハートマークを2ペア同時にゲットできるなんて、人生で最も幸せなダイビングとなった。

※2017年10月31日付けで、タツノオトシゴ種群に属する新種の記載論文が発表された。学名は「Hippocampinae haema」、標準和名は「ヒメタツ」。タツノオトシゴよりも体のサイズが小さいという特徴が、お姫さまを連想させることに由来する。特徴などを見ると、今回の個体はヒメタツの可能性が高い。

ocean⁺α

©ocean+ α ウェブマガジンの二次配布および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



ロマンチックに寄り添うダンゴウオをメルヘンに

ダンゴウオ

のさまざまな表情

親指の先ほどの大きな大人のダンゴウオ



今や田後の代名詞ともなったダンゴウオ。春先はこれを目当てに日本全国からダイバーが訪れる。もちろん他のエリアでも、春先にダンゴウオを見ることができる場所はたくさんある。しかし、田後の海ほど数多くダンゴウオが生息する地域は他にないのではないだろうか。

岩美のギザギザした海岸線が、栄養豊富な潮の流れを濾し取るような地形をしていることが影響している。そこに対馬海流に乗った季節来遊魚などさまざまな生き物が流れ着いてくるという。

だんご3兄弟、4兄弟なんて当たり前。時には1枚の海藻に20個体、1ダイブで80個体のダンゴウオを見た記録もあるというから驚きである。とても小さいため、じっくり粘って撮影したい被写体だ。海況が安定していれば、ゲストが何人いても1人1ダンゴウオは保証できるのが田後の強み。どっぷり集中できるので数匹のダンゴウオを絡めてさまざまな画作りを試すことができる。

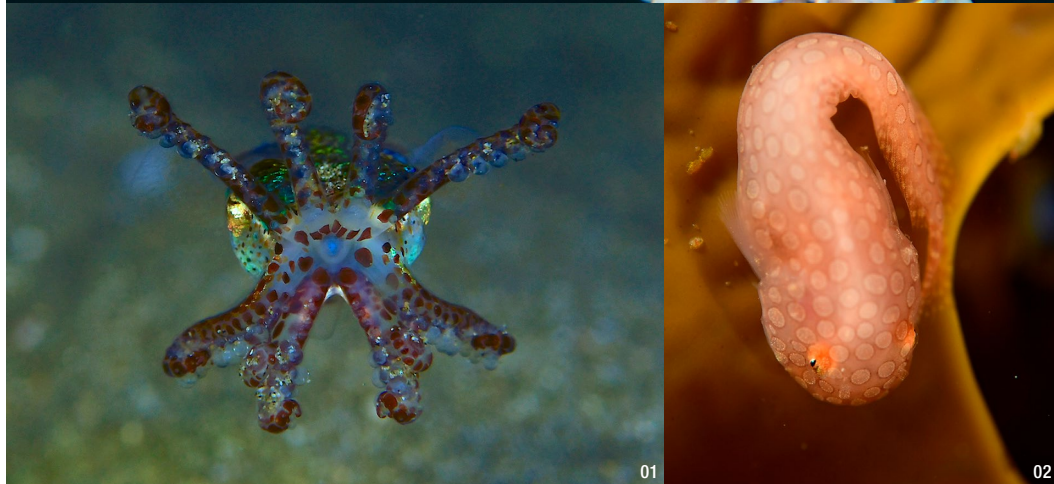
ショップには、スタッフ・山崎由香里さん手作り、実寸大のダンゴウオ模型が用意されている。初めての方は構図のイメージやライティングなど、こちらを使ってシミュレーションしておこう。

01. 真紅のダンゴウオ
02. ゴツゴツしたいかわい
個体 03. 田後では珍し
い、マボヤの上に乗った
緑の個体

カラーフィルターとスヌードで夜空を演出

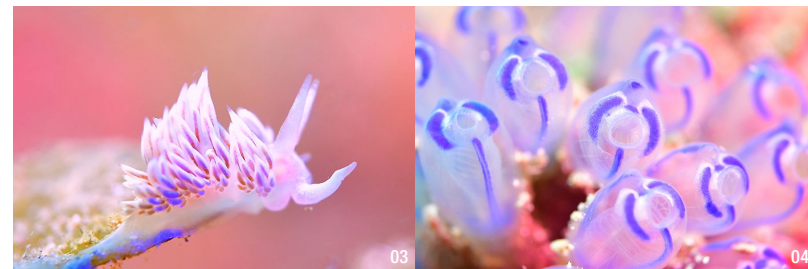
鳥取・田後 海中シオパークを潜る
2018 Winter [TAJIRI]

山崎さんも今期初確認となったイボイソバナガニを発見



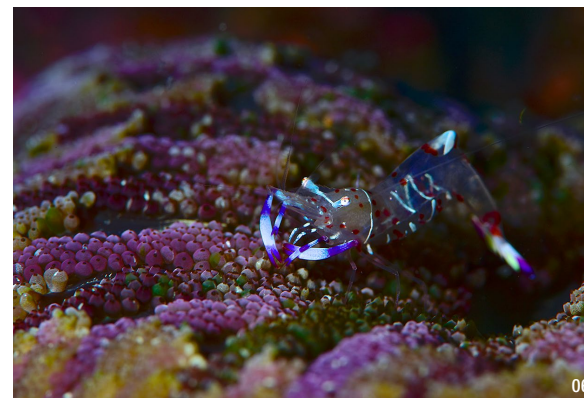
田後の アイドル たち

01. 夜の海中を漂うダンゴイカ 02. ビビットな水玉模様のピクニン
03. いたるところで見つかるサクラミノウミウシ 04. 愛くるしい表情のワライボヤ



ダンゴウオのイメージが強い田後の海だが、魅力あるマクロ生物たちの宝庫でもある。「ゴイシワラ」という田後を代表するポイントへ潜れば、シーズンを通して、時間がいくらあっても足りないと思えるはず。レアなウミウシ撮影だけに1ダイブ費やすもよし、ナイトダイビングで浮遊系生物などを狙うもよし。日本海のユニークな生き物たちをじっくり観察してもらいたい。

沖合いのポイントでは、日本海では激レアな甲殻類にも出会うことができる。太平洋側では当たり前に見える生物も、ここで見るとなぜかお宝に感じてしまうから不思議だ。



05. 真紅の色彩が目を引きスギノハウミウシ 06. 田後初確認となったハクセンアカホシカクレエビ

鳥取・田後 海中シオパークを潜る
2018 Winter [TAJIRI]

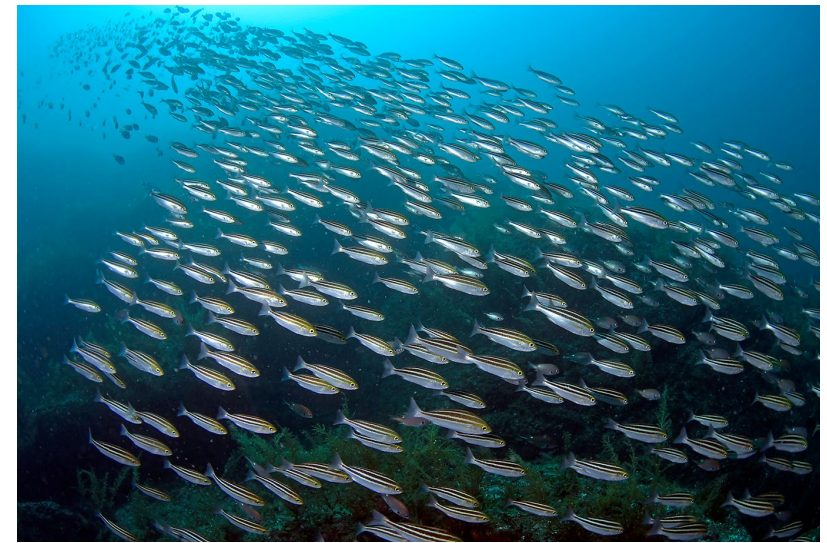


突然目の前をハマチの群れが覆う



「ヤマダシ」の待ち根
でハマチを狙う

ハマチ トルネードに 巻かれて



川のように群れるイサキ

夏場のシーズン（7～8月）は「ヤマダシ」というポイントが熱い。この時期は回遊するハマチの群れが見頃となる。潮流はやや速いので中～上級者向けのポイントではあるが、船からアンカーロープ伝いに潜降するので耳ぬきなどで焦ることはない。

根まで少し泳いだら、動かずにハマチを根待ちするようなダイビングスタイル。そこまで激しい流れではないが、地形に沿って複雑に流れるタイプの潮流なので、沖合いの根まではガイドさんと同じコースを後ろからついて行ったほうが安心できる。

太平洋側で潜ることの多かった私自身、ハマチがこれだけ群れている光景はとても新鮮でかなり興奮した。「ヤマ

ダシ」へは過去10回以上潜っているがハマチの遭遇率はほぼ100%。もちろん毎回大きな群れに当たるとは限らないが、かなりの高確率でハマチに出会える激アツなポイントである。

高密度な群れの写真を撮るためには、根からつかず離れずのりくりりとホバリングしていると、時折群れのほうからこちらの様子を見にくる瞬間がある。そこでいかにハマチとの距離をつめられるかが勝負の分かれ目だ。プレッシャーをかけると散ってしまうので注意。潮流が速いときに根から離れるのは危険なので、ガイドさんの指示に従いながら、迫力のあるワイド写真をゲットしよう。



体長1mくらいのエチゼンクラゲに遭遇



わずかに残ったマントを広げて優雅に泳ぐムラサキダコ

メタリックな体が美しいムラサキダコ

田後の 珍客を紹介

菜種島の洞窟内でアジの群れを撮影中、突然ダッシュでこちらに向かってくる山崎さんが視界に入った。おもむろに水中ノートをこちらに向けて、瞬間に洞窟の出口の方へ消えていく。

頭の中で一瞬見えた水中ノートの文字を復唱してみる。「ムラサキダコ……。え!? あの激レアなムラサキダコが出

現!」

慌てて山崎さんが消えていった洞窟の出口方向へダッシュすると、ダイバーたちが群がる先にまぎれもなくムラサキダコの姿が。特徴である長いマントは岩肌に絡みちぎれていたが、マントを^{おとり}兜として懸命に生きようとする健気な姿に思わず目頭が熱くなった。その

後、ダイバーたちが洞窟を去り、ムラサキダコは洞窟の中を抜けると外洋の明るい海へと泳いでいった。しばらくその勇姿を見届けたが、光の中に消えていく珍客のシルエットに「ありがとう」と心の中で手を振った。

撮影で訪れるたびに田後の海はたくさんさんのサプライズな贈り物をしてくれ

る。エチゼンクラゲを初めて見たのもここだった。そんな珍客との出会いはもちろん毎度興奮するが、小さなプラントンや真っ青な笑いボヤ、ジオパークの地形も自分にとってはまったく初めての体験だった。普段潜っているこの海が大好きな山崎さんは、毎回一緒になって興奮して必死に伝えてくれる。

鳥取・田後 海中ジオパークを潜る
2018 Winter [TAJIRI]

幻の ポイント 「イトグリ」に挑む

水深40m付近のV字の切れ込んだ根に群れるサクラダイ

カメラマンを寄せつけない、幻のポイントがある。その名も「イトグリ」。表層は速いときにはブン流れとなるため、かなり上級者向けのポイントであることは間違いない。さらに日本海はコンディションが変わりやすいため、短期間の取材でタイミングよく潜れて撮影できたカメラマンはほとんどいないという。

今年6月、初めて「イトグリ」に潜れるチャンスが訪れた。沖合いへと向かう船上では山崎さんの目つきがいつもより真剣。それもそのはず、まずは根を見つけるだけでも大変なのだ。さらに魚探で根を確認しても、アンカーを



潮に流されながらフロートを上げる

落とすタイミングが少しでも遅ければ、ただ深場で流されるだけのダイビングになってしまう。

無事狙い通りの場所にアンカーを落とし、流れに逆らいながらガイドロープを伝って少しずつ深度を落としていくと、ぼんやり根の影が見えてくる。明らかに日本海でイメージする景色とは異なっていて、カラフルなヤギの群生などが目に飛び込んでくる。その先に目を凝らすと、根のV字の窪みにサクラダイが集まっていた。根を覆い尽くすほどの数ではないが、この海にいること自体が奇跡的だ。

「ここは日本海、鳥取の海だよな」、何度も頭の中で自問自答する。

太平洋側の海に迷い込んできたような錯覚すらしてしまう、そんな不思議な体験だった。



日本海では一際カラフルなサクラダイのオス



ヤギ類が茂った根の上をスズメダイが乱舞する。これが日本海のもうひとつの顔

ocean⁺α

©ocean+α ウェブマガジンの二次配
付および画像・文章の複製、二次使
用を禁じます



ブルーライン田後
気配りとかだわりの
つまったお店

港まで徒歩10歩の好立地にありながら、広々とした店内に屋根付きテラスありという快適さ。メインのダイビングポイントまではボートで10～15分くらいと非常に近い。

フォト派もうなるほど充実したカメラやパーツ類も揃っている。忘れ物やトラブルにも即対応可能だ。おまけにナイトロックスも完備。まさにいたれりつくせりで、訪れるゲストさんへの細やかな気配りが随所につまった気持ちの良いお店だ。

そんなブルーライン田後だが、山崎さんが特にこだわったのは、意外にもシャワーの水圧だという。自分がこれまで利用した世界中のダイビングショップの中でも、1番の水圧だ。そんなお茶目なこだわりもちらほらと。

ブルーライン田後 4つのオススメポイント



その1 ナイトロックス対応



その2 新設されたテラス



その3 ショップからポートまで歩いてすぐ



その4 充実のカメラパーツ

お店はアフターダイブの観光にも最適な場所だ。世界ジオパークの山陰海岸に位置し、景勝地の菜種島も車で5分、鳥取砂丘まで車で30分と陸の観光も充実している。

いつも楽しく笑いの絶えない雰囲気でお迎えしてくれる、ブルーライン田後のみなさん。今回も思わず「ただいまー」と声をかけてしまう。



「大江ノ郷自然牧場」のふわふわのパンケーキに感動
☎0570-077-505

ブルーライン 田後

〒681-0071 鳥取県岩美郡
岩美町田後37-1
Tel.&Fax.0857-72-8520
<http://blueline.lolipop.jp>



鳥取砂丘の「砂の美術館」では圧巻の砂像が展示されている ☎0857-20-2231